

船坂峠

佐保光俊

奈良平安時代に都と九州の大宰府を結んでいた古代山陽道が、兵庫県(播磨国)から岡山県(備前国)へと越える峠が船坂峠(標高一九七メートル)である。近畿地方と中国地方を画する要所だ。船坂峠は(史実かどうかはさておき)『太平記』により、児島高德が隠岐に流される後醍醐天皇を奪還しようとして待ち伏せした地として、世に知られている。また、今昔物語集に、峠の兵庫側で置かれた野磨駅家(やまのうまや)で僧を襲おうとした毒蛇(おろち)が法華経を聞いて改心し人に生まれ変わった話が載っており、清少納言もこの話を枕草子で取り上げている。駅家跡の近くには落地(おろち)の地名が現存する。峠の岡山側には、地元の伝承として神功皇后ゆかりの石のあるという三石明神社がある。江戸時代には宿場町だ。三石(みついし)の今は、耐火煉瓦を作る工場の煙突が数本立つ静かな盆地の町である。

三石の穴門に吹く夏の風

三石に俄かに翳る百日紅

峠へと盆の町より上りけり

峠越す我に鳴きけり法師蟬

吉備に見て播磨に見たる雲の峰

稲の咲く播磨へと入る大路かな

道を問ふ家に散りをり百日紅

遠雷の吉備ふり返る大路かな

先ほどの墓参の人とすれ違ふ

秋蝶に導かれゆく大路かな

《作品鑑賞》

村上正人

船坂峠は近畿地方と中国地方を画する要所であり、峠を境に方言も異なる。佐保光俊先生は作品『船坂峠』で、この峠を古備から播磨へ越える道に感じられる風情と、季節が更から秋へと移る様子や表現された、平明な表現の中に、暮らした季節の移り、歴史までもが伝わってくる作品である。

三石の穴門に吹く夏の風
秋五造りのア、千果橋には四穴門があり、そのうち三列が川、一列が車道、もう一列が歩道となった。上には山陽本線が通っている。歩道の穴門を歩いたとき吹き抜ける風はやはり「夏の風」であろう。吉備に見て播磨に見たる雲の峰
峠を越える際に吉備側で仰ぎ見た峰を、峠を越えてから播磨側で見た峰を仰ぎ見ると、今一度新鮮な気持ちで眺めることができた。国境の峠というものを感ずることができる作品である。

先ほどの墓参の人とすれ違ふ
先ほど見かけた墓参の人とすれ違ふことをさりげなく書くことで、今度三石(三石)へ行く歩みが始めたことがわかる。どれほどの時間が経過したのかも伝わってくる作品である。

秋蝶に導かれゆく大路かな

都と九州の大宰府を結ぶ古代山陽道の大路を秋蝶に導かれるように歩む。秋蝶は春夏秋冬と違って風に逆らわずゆるやかに飛んでいる。大路を導くのは「道をし」ではなく「秋蝶」がふさわしいと思う。

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

備前から播磨へと古代からの道(大路)へたいてい(を)、船坂峠を歩かれた。その歴史を胸に置きつつ、自然を詠まれた端正な作品である。昔の街道を歩かれる佐保光俊先生の静かな歩行に、ひととき一緒に歩いたような心地がしてゆく。

三石の穴門に吹く夏の風

三石の穴門、その年月を経た美しい形が、吹いてくる風を一層涼しく感じさせる。
峠へと盆の町より上りけり
盆の習わしや歌などはその地域により異なる。備前の玉置盆はどのようなものだろうか。

吉備に見て播磨に見たる雲の峰
船坂峠を越え、播磨から雲の峰を見る。広い空、大きな雲、人の作った境界線はあっても、自然にはないのだ。

道を問ふ家に散りをり百日紅
道を聞いたその家に咲く百日紅。散り敷いた花をきめて、百日紅は美しい。

秋蝶に導かれゆく大路かな
行く道を先導するように、蝶が飛ぶ。残暑の大路を歩く先生に、小さな蝶は少なからぬ喜びをもたらしている。

《作品鑑賞》

亜矢

「船坂峠」は、十句全てが平明であり、一読して読み手を船坂峠へと誘ってくれる作品である。現地に行ったことがなくとも、作者の解説と共に、十年以上続いている歴史をしみじみと感じることができる。

峠越す我に鳴きけり法師蟬
まさに今、峠を越そうという時、法師蟬が鳴き始めた。「我」には、作者の何か悲しみを含んだ思いがこめられているように思う。

遠雷の吉備ふり返る大路かな
兵庫県側にいた時の句であろう。この遠雷は、偶然ではなく、必然だったのでは、と勝手に思ってしまった。

秋蝶に導かれゆく大路かな
中七がとても印象的で、切題的でもある。秋蝶は、春や夏の蝶にはない、はかなくもまたたかみのある味わいをもたらし。